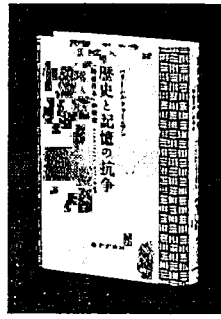


東洋史研究 11010/5/110 110頁

歴史と記憶の抗争

「戦後日本」の現在

ハリー・ハルトゥーニアン 著
カツヒコ・マリアノ・エンドウ編・監訳
(みすず書房・5040円)



Harry Harootunian
コロンビア大大学院 招
聘教授・東アジア研
究。著書に「近代によ
る超克一戦間期日本の
歴史・文化・共同体」
など。

日本研究に潜む政治力学

会、戦後の竹内好・田辺元・和辻哲郎らの天皇制論、『昭和天皇独白録』（九〇年）やハーバート・ビックス『昭和天皇』（二〇〇二年）など、二十世紀への転換期に登場した話題作への批評で構成する。

プッシュ政権下のアメリカから発信された良心的知性の鋭い批判精神に満ちているが、対象の政治的立場については荒っぽい決めつけもまじる。戦後にねじまげられた「記憶」との抗争は、いよいよこれから、ということも教えてくれる。

この著者の影響ばかりではないが、アメリカの日本研究では、セクシュアリティにも文芸にも学問にも働く政治力学の暴露がさかんだ。日本の若い研究者がそれにひかれるのは、日本の学問がすっかり批評性を失い、短絡思考が蔓延しているからにちがいない。

評者 鈴木 貞美

（国際日本文化研究センター教授）

第二次大戦後のアメリカでは、その世界戦略にそって各地の地域研究が行われた。日本も例外ではなく、アメリカのよきパートナーとして育成すべく、ライシャワーを筆頭に、非西洋圏における近代化、資本主義化の模範として描く近代化主義が支配的で、丸山眞男学派と支えあった。十八世紀中国がヨーロッパ貴族のあこがれの的だったことなど忘れ、「西洋に遅れたアジア」像がすっかり定着した。が、今日、その体制は完全に崩れ去った。

本書は、その崩解後を代表する論客のエッセー集である。第一章では、第二次大戦後のアメリカの日本学を支えたイデオロギーと制度の暴露が行われる。著者の面目躍如にして戦後の日米関係に関心をもつ人には必読。第二章は、日本戦前期のマルクス主義者、戸坂潤へのオマージュ。一九三〇年代日本マルクス主義の水準にあらためて気づかせてくれる。

以下、加藤典洋『敗戦後論』（一九九七年）と「新しい歴史教科書を作る会」との共通性の指摘、靖国神社問題、戦時下の「近代の超克」座談